



イヌワシのように 丸山健二



イヌワシのように

一九八一年五月一〇日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 丸山健二

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

三 東京都千代田区一ツ橋二一五六一〇

出版部 (〇三) 二三〇一六三六一

電話 販売部 (〇三) 二三八一二七八一

印刷所 大日本印刷株式会社



© K. MARUYAMA, Printed in Japan, 1981

0093-772316-3041

検印廃止。落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

【イヌワシのように・目次】

カラチ

海

月と花火

夜釣り

イヌワシのように

セ

咒

五

二七

四七

ブックデザイン／内部
隆

イ
ヌ
ワ
シ
の
よ
う
に

カ

ラ

チ

☆

私はすでに覚悟を決めてしまっていた。というよりは、半ばふてくされていた。元はいえば経理課の責任だった。少しでも出張費を浮かそうとして、安い切符に手を出すからこんなことになってしまったのだ。二流の飛行機に乗ったのが間違いだった。

まず出発が一日延ばされた。それからマニラでは、エンジンの整備とかで七時間も待合室に閉じこめられた。そんなこんなで、結局ナイロビ行きの便への乗り継ぎがうまくゆかなくなった。次の便が出るまで、カラチで三、四日待たされることになった。

ツアーの連中といっしょに、私はゆっくりタラップを降りて行った。途端に蒸し暑い夜気にすっぱりと包まれて、シャツが肌にへばりついた。闇夜で、遠くではさかんに稲妻が走っていた。カラチへ降りたのは初めてだったが、空港の臭いはどこも同じだった。油類の臭いのほかに、後進国特有の餛えた臭いが漂っていた。

ツアーの連中は皆疲れ切っていた。まだ目的地のケニアに着いたわけではないのに、旅はまだ始まったばかりだというのに、誰もがぐったりしていた。こうした旅には馴れているはずの私でさえ、体がだるかった。おそらく仕事の疲れが出たのだろう。今度の契約は会社にとってはもちろんのこと、私個人にとってもきわめて重要な仕事だった。インド人が経営しているその会社の信用を得るまでに、丸三年もかかってしまった。四年目にしてようやくサインを交すところまで漕ぎつけたのだ。この契約が成立すれば、うちの会社は今後十年間は安定するに違いなかった。そして功労者である私は、同僚たちを一気に引き離すことができるはずだった。

私が紛れこんだツアーには、添乗員がひとりついていて、若い彼にしてはよくやっていたが、こんな場合ほとんど役に立たなかった。今ではひたすら詫びることが彼の仕事のすべてになっていった。しかし、不平を言う者はいなかった。カラチで待たされることがはつきりしたときでも、皆はため息をついたり、舌打ちしたりしたくらいなものだった。念のために私は、ケニア航空へのエンドースを頼んでみた。だが、添乗員の返事はこうだった。「それはちよつと無理じゃないでしょうか」

空港を出たあと私たちは、ぼろぼろのバスに詰めこまれて近くのホテルへ連れて行かれた。ホテルの門から正面玄関までの道の両側に植えられている木々には、おびただしい数にのぼる豆電球が飾りつけられていて、それがめまぐるしい点滅を繰り返していた。噴水には強烈な照明が浴びせられて、どの水柱も原色に染まっていた。まるでキャバレーだっ

た。上等のホテルではない何よりの証拠だったが、ツアーの連中はどつと歓声をあげた。

仕事できたのは私だけだと思っていた。ところが、観光旅行にしては少し様子がおかしい娘がひとりまじっていた。彼女は出発するときから浮かない顔つきをしていた。ほとんど誰とも口をきかなかった。いくらか太目の体をとっても派手な柄のワンピースで包み、そのために目立つことは目立ったが、彼女はずっと押し黙っていた。出発のときから塞ぎこんでいた。機内でも、マニラ空港の待合室でも、椅子に坐ったきり微動だにせず、本当に必要な言葉しか発しなかった。そうした性格かもしれないが。

添乗員はフロントの男と英語で何やら話し合っていた。その間私たちは薄暗いロビーで、しつこく群がってくる蚊を手で追い払いながら、小声で喋っていた。私のことを旅馴れていると見たツアーの連中は、さかんに話しかけてきた。私はわざと添乗員に聞えるようにして話した。パキスタン航空ではこんなことはしよっちゅうあるのだとか、少々高くついても次は一流の航空会社にしたほうがいいとか言ってやった。皆は私の話に興味に耳を傾けていた。

だが例の娘は、相変らず仏頂面をして、隅っここのソファに坐ったまま動かなかった。どう見ても後悔している顔つきだった。出発するときに彼女に抱きついた年寄りは、おそらく母親だったのだろう。ふたりとも泣いていた。いや、泣いていたのは母親のほうで、娘は怒っていたのだ。「もういいから、早く帰ってちょうだい」とか何とか言いながら、彼女は母親の肩を何回も小突いた。しかしふたりは、結局出発直前まで離れようとしなかつ

た。

フロントから戻ってきた添乗員は、ひとりひとりの名を呼びあげて確認をとりながら、部屋の鍵を手渡した。ついで彼は教師のような口調で、こう言った。おそらく三日か四日、ここで待たされることになるだろう、と。次のナイロビ行き便には間違いなく乗れるだろう、と。朝食と夕食はホテルの食堂でとる限り、サインだけで食べられるし、宿泊料金も航空会社で負担する、と。それから彼はこんなことを言った。

「考えようによっては運がいいのかもしれないよ。ケニアだけではなくて、パキスタンも見物できるんですからね」

すかさず私は、もう一度ケニア航空へのエンドースを頼んでみた。添乗員を困らせてやろうとしただけだ。すると彼はしぶい顔をして、「まず無理でしょうね」と言った。それから彼は、全員に忠告した。貴重品はいつも身につけておくこと。買物をするときはまず半額に値切ること。屋台のような店で飲んだり食べたりしないこと。生水にも気をつけること。

私たちはそれぞれ自分の部屋へと散らばって行った。長い廊下を歩かなければならなかった。廊下のあちこちに、ホテルの下働きをしている男たちがごろごろしていた。こうした国ではよくあることだった。賃金の安さのために、どこかの職場にも必要以上の人間があふれていた。かれらはチップをあてにして生きていた。だからとても愛想がよく、客の足音を聞きつけると素早く立ちあがり、荷物を持とうとして近づいてきた。

だが、私たちは手荷物しか持っていなかった。ほかの大きな荷物は空港に預けたままだった。あてがはずれた男たちは、それでも部屋まで案内することでチップをせしめようとつきまとった。私はかれらを追い払いながら、廊下の奥へ、奥へと歩いて行った。

中庭からは熱帯植物の甘い匂いと虫の声が流れていた。そして天井には、電燈に集まる昆虫を狙って、ヤモリが何匹もへばりついていて。私のすぐ後を歩いてくるのは、あの沈んだ顔の娘に違いなかった。ひきずるような足音で彼女だということがわかった。私の部屋は廊下の突きあたりで、彼女の部屋はその隣りだった。

ホテルとは名ばかりのひどい部屋だった。窓は廊下側にしかついておらず、簡易ベッドがひとつと椅子がひとつ、あとは奥にシャワーとトイレがあるだけで、とても狭かった。しかも蚊がたくさん飛び交っていた。仕切り壁が薄いために、隣りの部屋の物音が筒抜けだった。

あの娘の動きが手にとるようにわかった。彼女はベッドに腰をおろした。パネのきしむ音が聞えてきた。それから鼻をかむ音が聞え、あとは急に静かになった。シャワーも浴びないで眠ってしまうつもりなのだろうか。おそらく彼女にとって海外旅行は初めての経験なのだろう。ひよっとすると、ホテルに泊るなんてことも初めてなのかもしれない。彼女が部屋の鍵をどうやって扱えば扉を開けることができるかも知らなかった。かなり手子ずっていたようだ。田舎から出てきたのかもしれない。

私はすぐにシャワーを浴びた。水と湯の切り替えレバーの調子がわるくて、ひどい目に

あった。それでも汗を流すことはできた。タオルは自分のを使った。こんなホテルのタオルにはどんな病原菌がついているかわかったものではなかった。三日分の下着と防虫スプレーを持ってきたのは正解だった。

私は灯りを消してベッドにもぐりこみ、タバコを喫った。蚊の羽音とクーラーの音が一段と強まった。落着いた気分だった。なぜか私は、家にいるときよりも、どこかの国の知らないホテルにいるときのほうが落着くのだった。今夜はゆっくり眠って、あしたの朝会社へ電話を入れよう。そう私は自分に言い聞かせた。

それにしても、こんなところで三日も四日もじっとしているわけにはゆかなかった。たとえ一週間遅れたとしても先方の会社が今回の契約を破棄することなどまったく考えられなかったが、油断は禁物だった。なにしろ相手はこすっからいインド人だったし、商売敵ならいくらでもいた。ケニア航空へのエンドースが不可能だとすれば、カラチからナイロビまでの切符を別を買うしかなかった。二十万円くらいはかかるだろう。そんな出費に対して経理課が首を縦に振ってくれるはずはなかった。上司にしてもここで待つことを勧めるに違いなかった。

だが、私は急ぎなかった。たとえ身銭を切っても早くナイロビへ行きたかった。今回の仕事だけは万全を期したかった。あの用心深いカーン氏のサインを一日も、一時間も早くもらいたかった。それさえもらえばひと安心だった。おそらくカーン氏は、サインする前にもう一回くらい賄賂を求めてくるだろう。現金ではなくて、日本の自動車を欲しがるか